世界遺産 富士山

WORLD HERITAGE

FUJISAN

信仰の対象と芸術の源泉

SACRED PLACE AND SOURCE OF ARTISTIC INSPIRATION

冨嶽三十六景 神奈川沖浪裏（葛飾北斎）山梨県立博物館蔵

世界遺産とは

1972年のユネスコ総会で「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」が採択されました。世界遺産とは、この条約に基づき、後世に引き継いでいくべきものとして世界遺産委員会によって選ばれた文化と自然の遺産のことです。世界遺産として登録されるには、資産が顕著な普遍的価値（国境や時代を超え、人類にとってかけがえのない価値）があること、未来に引き継ぐための保存管理の仕組みが整っていることが必要です。

世界遺産の種類

文化遺産
顕著な普遍的価値を有する記念物、建造物群、遺跡、文化的景観など

自然遺産
顕著な普遍的価値を有する地形や地質、生態系、絶滅のおそれのある動植物の生息・生育地など

複合遺産
文化遺産と自然遺産の両方の価値を兼ね備えているもの

世界遺産となった富士山

日本一の高さ（標高3,776メートル）を持つ活火山、富士山。

2013年6月、第37回世界遺産委員会において、「富士山 –信仰の対象と芸術の源泉-」の名称のもと世界文化遺産に登録されました。その背景には、富士山が『信仰の対象』であるとともに、『芸術の源泉』として、日本人の自然観や日本文化に大きな影響を与えてきた歴史があります。

かつては噴火を繰り返す山として畏（おそ）れられていた富士山は、富士講と呼ばれる信仰集団や浮世絵の登場などにより、日本人にとって身近な存在となりました。人と自然が信仰と芸術を通して共生する姿は、富士山が持つ大きな特徴と言えるでしょう。そうした歴史・文化にゆかりのある25カ所から成る富士山を、ユネスコ世界遺産委員会は未来に受け継ぐべき世界の宝として認めたのです。

富士山と信仰

日本一高くそびえる富士山は日本人にとって神聖な存在です。古くから『信仰の対象』として、日本人の自然観に大きな影響を与えてきました。

古来、火山活動を繰り返す富士山は、山麓から山頂を仰ぎ見て崇拝する「遥拝（ようはい）」の対象となってきました。やがて噴火が鎮まると、日本古来の山岳信仰と外来の仏教が習合した「修験道（しゅげんどう）」の道場として、多くの修行者（修験者（しゅげんじゃ））が山頂への「登拝（とはい）」を行う場所となります。さらに時代が進むと、道者（どうしゃ）と呼ばれる一般の人々が、修験者に導かれて山頂を目指すようになりました。そして、17世紀以降は「富士講」と呼ばれる富士山信仰が隆盛します。数多くの富士講信者が登拝するとともに、山麓の霊地を巡る「巡拝（じゅんぱい）」を行うようになり、登山者を支援する御師（おし）住宅など施設の整備も進みました。

現在も夏の登山時期になると、御来光（ごらいこう）を拝んだり、噴火口周囲を一周するお鉢巡りなどをしたりするために、山頂を目指す人々で賑わっています。

富士山本宮浅間大社蔵

絹本著色富士曼荼羅図（けんぽんちゃくしょくふじまんだらず）

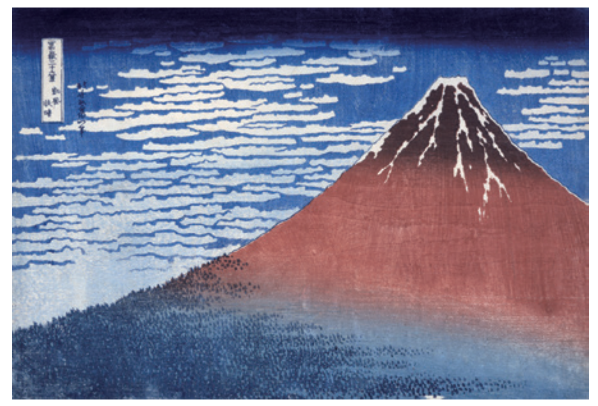
室町時代に描かれた絵画。浅間大社や、道者が湧水で身を清め登拝する様子が1枚の曼荼羅図としてまとめられています。

富士山と芸術

雄大さと美しさを兼ね備える富士山は、『芸術の源泉』として、日本人のみならず海外の芸術家にもインスピレーションを与えてきました。絵画、文学、詩歌、演劇の題材となり、数多くの芸術作品を生み出しました。

古くは8世紀に編まれた日本最古の和歌集「万葉集」にも富士山を詠んだ和歌が見られ、「竹取物語」「伊勢物語」などの古典作品、俳句や漢詩にも題材として取り上げられてきました。平安時代以降は絵画の世界にも登場しはじめ、江戸時代には葛飾北斎（かつしかほくさい）の「冨嶽三十六景（ふがくさんじゅうろっけい）」や歌川広重（うたがわひろしげ）の「東海道五拾三次（とうかいどうごじゅうさんつぎ）」などの富士山を描いた浮世絵が人気になります。それらは海外にも輸出され、ゴッホやモネなどの西洋芸術家に衝撃を与えました。

近代では、横山大観（よこやまたいかん）の「群青富士（ぐんじょうふじ）」で屏風絵として描かれたり、夏目漱石（なつめそうせき）や太宰治（だざいおさむ）の文学作品の題材となるなど、富士山の『芸術の源泉』としての価値は今もなお薄れることはありません。



山梨県立博物館蔵

冨嶽三十六景 凱風快晴（がいふうかいせい）（葛飾北斎）

各地から望む富士山の形姿を描いた浮世絵作品で、海外の芸術家にも影響を与えました。「冨嶽」とは富士山のことを指します。

富士山を未来に引き継ぐための取組

富士山憲章

山梨県と静岡県は、富士山を守り、育み、その恵みを未来へと引き継ぐため、「富士山憲章」を定めました。両県は、関係市町村、関係団体と協力し、富士山を守る気持ちを育む活動を進めています。

1　富士山の自然を学び、親しみ、豊かな恵みに感謝しよう。
1　富士山の美しい自然を大切に守り、豊かな文化を育もう。
1　富士山の自然環境への負荷を減らし、人との共生を図ろう。
1　富士山の環境保全のために、一人ひとりが積極的に行動しよう。
1　富士山の自然、景観、歴史・文化を後世に末長く継承しよう。

富士山の日

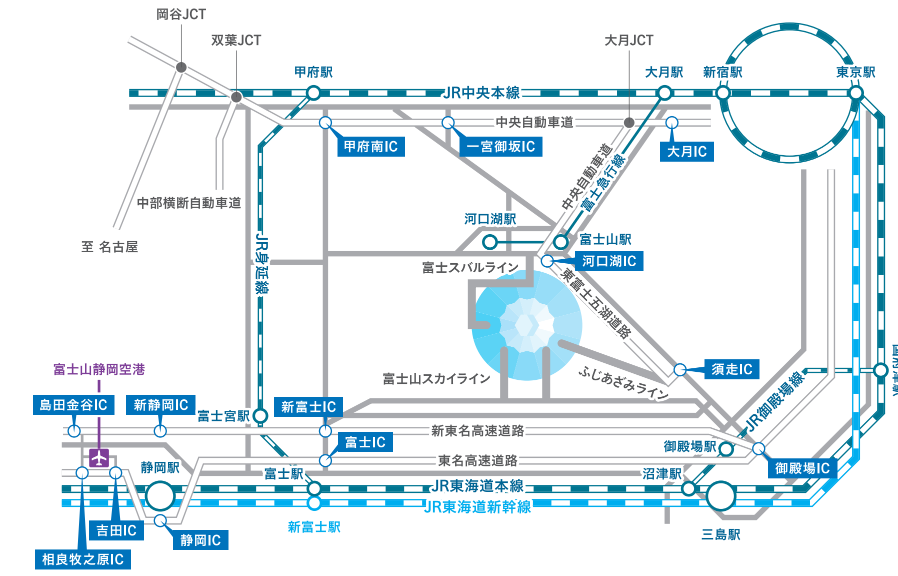
山梨県と静岡県は、毎年2月23日を「富士山の日」と定めました。富士山への理解と関心を深める日として、さまざまな情報の発信やイベント活動などを行っています。

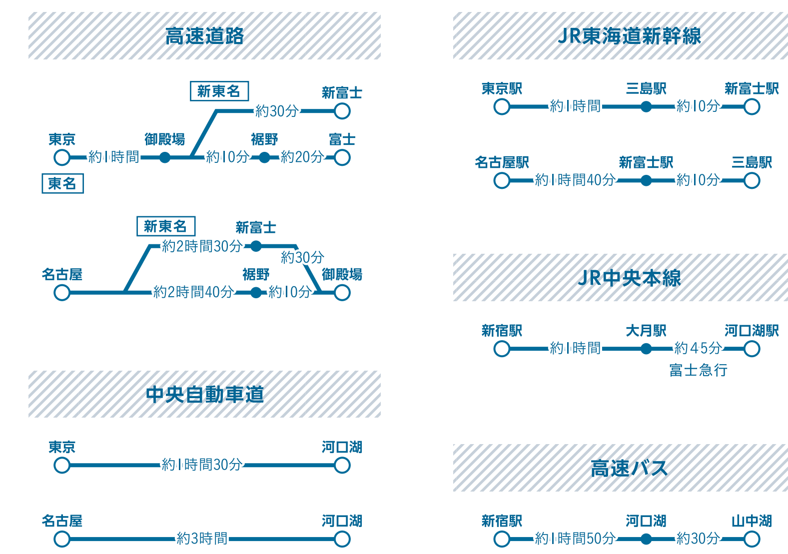
富士山保全協力金

世界の宝 富士山を後世に末永く引き継いでいくため、登山者のみなさんから協力金を募り、環境保全や安全対策等の事業に活用させていただいています。

いつまでも富士山を世界遺産に　富士山保全協力金
静岡県・山梨県

アクセスマップ





いつまでも富士山を世界遺産に

発行

富士山世界文化遺産協議会

山梨県　富士吉田市　身延町　西桂町　忍野村　山中湖村　鳴沢村　富士河口湖町
富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合　鳴沢・富士河口湖恩賜県有財産保護組合
静岡県　静岡市　沼津市　三島市　富士宮市　富士市　御殿場市　裾野市　清水町　長泉町　小山町

山梨県事務局　山梨県県民生活部世界遺産富士山課　〒400-8501 山梨県甲府市丸の内1-6-1
Tel. 055-223-1330　Fax. 055-223-1781　E-mail fujisan-hz@pref.yamanashi.lg.jp

静岡県事務局　静岡県文化・観光部富士山世界遺産課　〒420-8601 静岡県静岡市葵区追手町9-6
Tel. 054-221-3746　Fax. 054-221-3757　E-mail sekai@pref.shizuoka.lg.jp

www.fujisan-3776.jp

編集協力：認定NPO法人 富士山世界遺産国民会議

平成28年5月

噴火と遥拝
～富士山信仰のめばえ～

~11TH CENTURY

富士山の噴火

古来、富士山麓では、富士山に対する展望を意識して集落や祭祀の場が形成されていました。8世紀から9世紀頃、人々は度重なる噴火を、火の神「浅間大神」の怒りと考えました。それを鎮めるために山麓から山頂を仰ぎ見て崇拝する「遥拝」の習慣が生まれ、各地に遥拝所（1-6 北口本宮富士浅間神社、3山宮浅間神社）が設けられました。

浅間神社の建立

800年から802年に起こった延暦噴火、864年の貞観噴火など、富士山は大規模噴火を繰り返しました。それを鎮めるため、浅間大神を祀った2富士山本宮浅間大社や7河口浅間神社、8富士御室浅間神社などが建立されたと考えられています。

万葉集
日本最古の和歌集。歌人・山部赤人が「田子の浦ゆうち出でてみれば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」と、富士山の美しさを詠んでいます。

竹取物語
日本最古の物語作品。帝はかぐや姫から受け取った不老不死の薬を日本一高い山で焼き、その山は「不死（＝富士）」の山になったと書かれています。

聖徳太子絵伝
聖徳太子の生涯と功績をまとめた絵画。太子が愛馬に乗って富士山を駆けた様子が描かれています。

奈良県／聖徳太子絵伝__3面（部分）
東京国立博物館蔵
Image: TNM Image Archives

修験者と登拝
～富士山信仰の大衆化～

12TH～ CENTURY

修行の場としての富士山

12世紀頃になると富士山の噴火活動が鎮まったことから、修験者と呼ばれる宗教者たちは、富士山を山岳修行の地として、富士山の神仏から霊力を得るために山頂を目指す「登拝」を志すようになっていきます。
1-1 山頂の信仰遺跡群

修験者《末代上人》

富士山に数多く登拝したと伝えられる修験者の末代上人は、山頂に大日寺を建立し、南麓の村山に富士山興法寺（現在の4村山浅間神社）を構えたとされています。多くの宗教者たちが、厳しい修行によって霊力を得るために、村山に集いました。

登拝の広がり

14世紀以降になると登拝の文化が広がり、道者と呼ばれた庶民の信者も、修験者に導かれて登拝を果たすようになります。5須山浅間神社、6富士浅間神社など登山口の浅間神社を拠点とする各登山道（1-2 大宮・村山口登山道、1-3 須山口登山道、1-4 須走口登山道、1-5 吉田口登山道）の整備が進むとともに、各登山口では道者を迎える集落が形成されました。

清見寺蔵

富士三保清見寺図（伝雪舟筆模写）
富士山と図三保松原、清見寺（静岡市清水区）の3方所を描いた水墨画。頂上を3つの峰に描く「三峰型」の代表作品です。

1-6

北口本宮富士浅間神社
浅間大神が祀られていた遥拝所を起源として建立されたと伝えられる浅間神社。後に、吉田口登山道の起点として富士講とともに発展した神社です。

2

富士山本宮浅間大社
全国の浅間神社の総本社。噴火を鎮めるために浅間大神を祀ったことを起源とし、806年に現在の地に社殿を移しました。

3

山宮浅間神社
富士山本宮浅間大社の前身で、社殿の代わりに遥拝所が設けられ、富士山に鎮火の祈りを捧げたといわれています。

7

河口浅間神社
9世紀後半の噴火を機に建立されたと伝えられる浅間神社。河口の地は、都と甲府盆地を結ぶ官道（御坂路）の宿駅として栄えました。

8

富士御室浅間神社
富士山中に最も早く祀られたともいわれる浅間神社。吉田口登山道の二合目に修験や富士講の拠点である本宮が、河口湖畔には里宮が置かれています。

1-1

山頂の信仰遺跡群
修験者の登拝が始まると、山頂の火口壁に沿って信仰の拠点が建てられました。火口の周囲にある8つの峰を、極楽浄土を表す八葉蓮華に見立てて巡る「お鉢巡り」も行われました。

4

村山浅間神社
末代上人が修験道の拠点とした浅間神社。富士山本宮浅間大社を起点とし、村山浅間神社を経て山頂に向かう登山道は、多くの修験者に利用されました。

1-2

大宮・村山口登山道（現在の富士宮口登山道）

5

須山浅間神社
須山口登山道の起点とされた浅間神社。この道は宝永大噴火で大きな被害を受けました。

1-3

須山口登山道（現在の御殿場口登山道）

6

富士浅間神社（須走浅間神社）
延暦大噴火を受けて807年に造営されたと伝えられる浅間神社。須走口登山道は富士講信者の巡拝に利用されました。

1-4

須走口登山道

1-5

吉田口登山道
北口本宮富士浅間神社を起点とし、現在でも山麓から山頂まで徒歩で登ることができる唯一の登山道です。

25

三保松原
この地から望む美しい富士山の姿は、多くの芸術家に影響を与えてきました。「万葉集」以降の多くの和歌集に登場し、謡曲「羽衣」の舞台や浮世絵の題材としても取り上げられています。

9,10
御師住宅
（旧外川家住宅・小佐野家住宅）
道者や富士講信者が登拝する際、寝食の提供を行った施設。
＊10小佐野家住宅は非公開

13~20
忍野八海
富士山の湧水からなる8つの池（出口池、お釜池、底抜池、銚子池、湧池、濁池、鏡池、菖蒲池）の総称。「富士山根元八湖」と呼ばれる古くからの霊地でした。

21
船津胎内樹型
溶岩流が樹木を巻き込んでできた溶岩樹型のうち、内部が人間の胎内に似たものを胎内樹型と呼びます。富士講信者が「胎内巡り」という信仰活動を行いました。
＊22吉田胎内樹型の内部は一般公開されていません

22
吉田胎内樹型

23
人穴富士講遺跡
富士山の神の御在所として伝えられる溶岩洞穴。長谷川角行が修行の拠点としたことから、富士講の聖地となりました。

24
白糸ノ滝
富士山の火山層からの湧き水が流れ出る名瀑。長谷川角行が人穴に入る前に身を清めた地とされ、富士講信者の巡礼の場ともなりました。

1-7
西湖

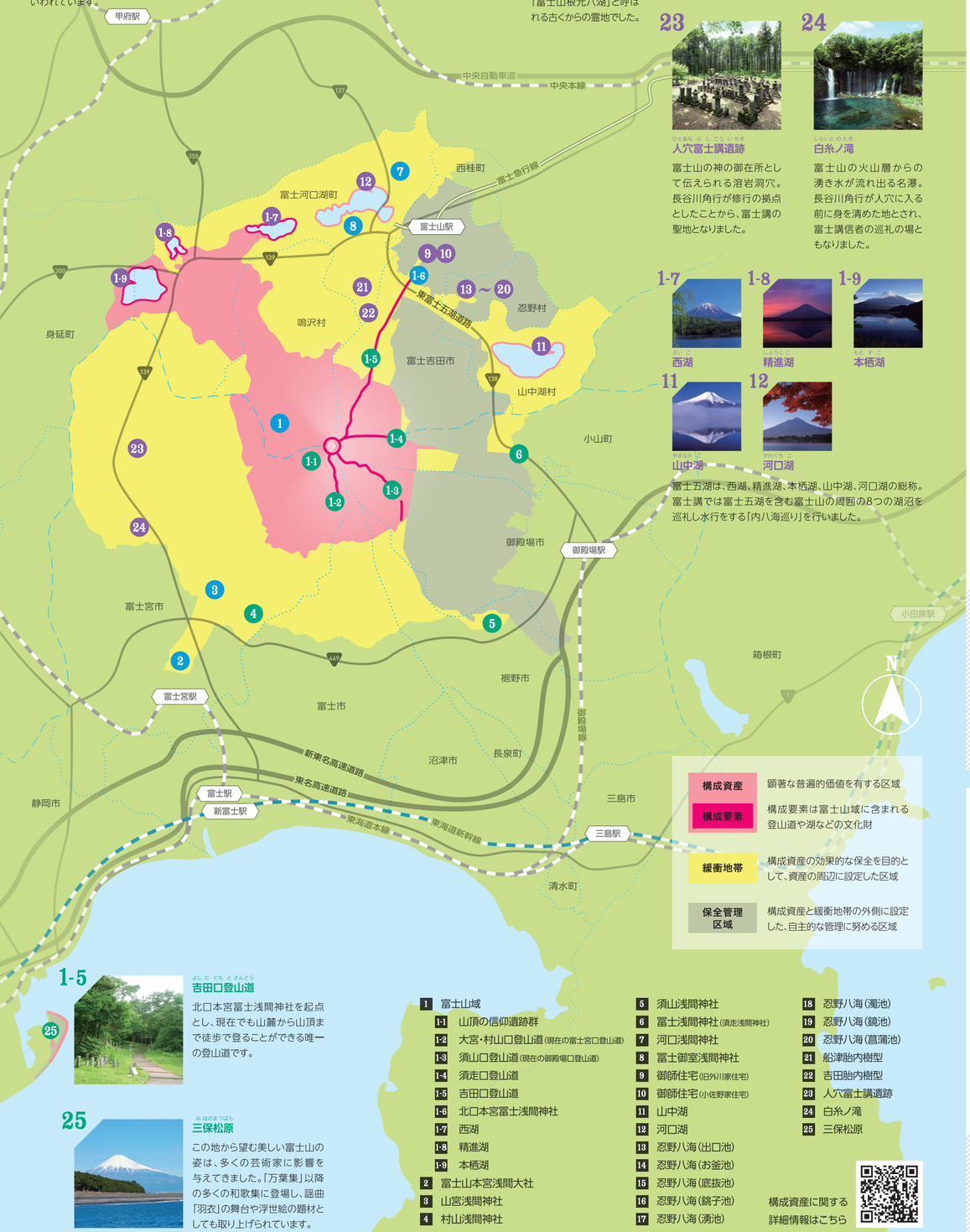
1-8
精進湖

1-9
本栖湖

11
山中湖

12
河口湖

富士五湖は、西湖、精進湖、本栖湖、山中湖、河口湖の総称。富士講では富士五湖を含む富士山の周囲の8つの湖沼を巡礼し水行をする「内八海巡り」を行いました。



富士講と巡拝
～富士山信仰の隆盛～

17~19TH CENTURY

長谷川角行と聖地巡礼

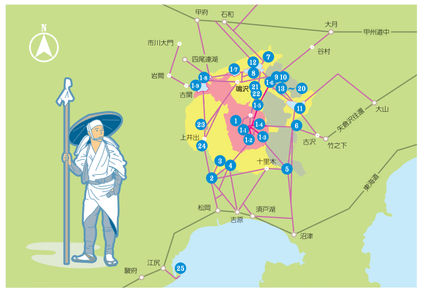
17世紀になると、富士山で修行した長谷川角行を祖とする富士山信仰「富士講」が誕生します。角行が修行したとされる図人穴富士講遺跡や図白糸ノ滝、内八海（1-7 西湖、1-8 精進湖、1-9 本栖湖、11 山中湖、12 河口湖など）、外八海をはじめ、元八海（19～図忍野八海）、図船津胎内樹型、図吉田胎内樹型などを聖地として巡礼しながら富士山を崇拝する「巡拝」の信仰形式ができあがります。

富士講の流行と巡礼路

18世紀、長谷川角行ゆかりの地を巡拝する富士講が、庶民に人気を博します。それぞれの聖地を巡る巡礼路は、富士山の構成資産となった山麓の浅間神社や名所・旧跡をつなぐ道として多くの道者が行き交いました。また、登山口では道者の案内や世話を務めた御師の居住する9 10御師住宅が発達しました。

富士山への巡礼路図 19世紀中頃の様子

富士山の巡礼路は順番にたどる一本の道ではなく、目的に応じて様々なルートが利用されていました。この図は、富士講の隆盛に伴い、多くの巡礼路が整備された19世紀中頃（江戸時代末）の巡礼路を示したものです。



東海道五拾三次　原 朝之富士（歌川広重）
東海道の53の宿場町を描いた浮世絵の連作。川崎、箱根、吉原、由比などを描いた作品に富士山が登場します。

静岡市東海道広重美術館蔵

富士登山の多様化

19TH～ CENTURY

近代化と富士山信仰

近代化によって、富士山周辺地域では鉄道網や自動車道が整備され、五合目から登山する方法が進んだことで、観光など富士登山に対する動機が多様化しました。しかし、現在も多くの登山者が山頂などで「御来光」を拝み、「お鉢巡り」を行うなど、富士山への信仰心は今に受け継がれています。

山頂から望む御来光

©株式会社ブレック研究所

静岡県立美術館蔵

群青富士（横山大観）
群青色の山肌と残雪の対比が鮮やかな屏風絵。琳派の研究を基礎に描かれました。